

## 学外研究報告書

野澤和典（経済学部）

### <研究の実施状況>

半年間の学外研究員として受け入れ機関を決めるにあたり、一度も長期滞在経験のなかったカナダを選択した。その理由は、多民族多文化国家を形成し、移民を数多く受け入れてモザイク文化を持ち、異文化コミュニケーションの研究のよい条件を持ち、ネットワーク環境も充実していることが大きな要因であったのと、米国と比較して犯罪率も低く、安全な生活基盤に立った研究生活を送れる環境を提供してくれる国であったからである。幸運にも受け入れてくれたのは、Rits-UBC Academic Exchange Program (RUAEP)の学生たちを過去11年間受け入れ、本学との学術交流活動が盛んな The University of British Columbia (UBC)の Language and Literacy Education Department (LLED)であった。数年前に知りあった LLED に所属する Dr. Keneeth Reeder に連絡するや否や、彼自身フランスのニース大学で学外研究中にも拘わらず、学部長と交渉をしてくれ、すぐに客員研究員としての資格を与えてくれた。但し、研究生活を送るにあたり、大学内の寮などへの入居がよいと考え、8ヶ月前に UBC の関連部門に入居申込をしたが、出発 2ヶ月前になっても利用できる状況にならず、学外の貸家を自ら探すことを余儀なくされた。従って、主たる研究をするオフィスとして Rits-UBC House の共同オフィスの一部を利用させてもらったが、日々の往復には多少の不便さが生じてしまった。

オフィスは Rits-UBC House の一階にあり、共同利用のキッチン、トイレがあり、RUAEP で教える主任教員や非常勤講師らが利用する所である。ネットワークは利用できたが、配置されている共同利用パソコンは古い機種で、英語 OS と Office 2000 が入っているだけのものであったため、全く利用せず、持参したラップトップ・パソコンを接続して、日々のコミュニケーションや情報収集の道具として利用した。また、電話は新たに設置してくれたので、問題なく使えたが、プリンタは機種が古く、メモリ不足などが原因で、時々印刷ができない状態が生じた。しかし、研究生活も後半になってから、Rits Lab からレーザ・プリンタが移動提供され、格段に便利になった。コピー機は3階にある RUAEP Office で利用し、使用料をまとめて払った。その他 LLED の配慮で大学院生と同等の図書利用資格を得、大学図書館に加え、LLED の Literacy Educational Resources Center 等も利用でき、資料収集においては大いに役立った。独自のイ

インタビュー映像データベース(Original Movie Clips for Listening)作成に多大な協力を得たのは RUAEP の関係者であり、今後の英語カリキュラム改善への参考になる情報を入手できたのは English Language Institute 関係者からで大変感謝している。

#### <成果の概要>

半年間という短い在外研究ではあったが、多くの研究成果が得られた。それらを大きく分けると、次のようになる。

第一に、2001-2003 年度の科学研究費「特定領域研究(A)：音声言語処理技術と学習者モデルを用いた語学学習システムの研究」(ウ班) 分担者として研究を実施したが、2 年目の目標であった英語母語話者によるオリジナル・ムービー・クリップ CALL 教材用素材のために必要であった英語圏でのインタビューが収録でき、それらを QuickTime Movie Clips として圧縮・編集した 14 の CALL 素材が作成できたことである。ファイルそのものの圧縮や音声素材のスク립ト化も含め編集作業には相当な時間がかかるので、今回のバンクーバーでの長期滞在をしての作業時間の確保はまたとない機会であった。スク립ト作成は音声データからの変換がトピック次第で日英語母語話者には容易ではなく、英語母語話者のチェックも含めた後で、リスニング用の各種教材作成が続き、かなり時間がかかるからである。本報告書を出した段階においては、すべてが 2002 年度経済および経営学部用の新 CALL 教材として即座の利用ができるまでには至っていなかった、第 2 セメスター用に順次完成させ利用できるようになった。2001 年度の教材開発研究の成果については、特定領域研究(A)第 2 回全体会(学情センター)での代理者(同じ班の分担者である本学理工学部の山下洋一教授)の協力を得て、ポスターセッションで報告をしており、2001 年度科研プロジェクト分担者としての報告書は、全体を網羅する印刷物に含まれて文部科学省に送られ、事務局のあるメディア教育開発センターの科研関連ホームページ([http://resource01.nime.ac.jp/Kaken/05publication/01/13/k03/k03\\_07.pdf](http://resource01.nime.ac.jp/Kaken/05publication/01/13/k03/k03_07.pdf))にも収録された。さらに、「オリジナル素材を使った英語リスニング教材」の題で、コンピュータ利用教育協議会(Council for Improving Education through Computers)が 2002 年 8 月 6-8 日に大学生協連合会と共催した PCC 2002 カンファレンス(早稲田大学)および 2002 年 8 月 14-17 日に欧米ばかりでなく、世界中から CALL 研究者が多数集まり、研究情報交換がなされる EuroCALL Conference 2002 (フ

インランド) で口頭発表をした。

第二に、今回の在外研究の主たる研究分野に関わる論文作成など研究成果の公表については、代表的なもの 3 点が以下に示されている。一つは、京都ノートルダム女子大学の 2002 年度大学院 (応用英語研究科) の設置によるプロジェクトとして、昭和堂 (京都) から 2002 年 2 月に出版された『応用英語研究論集』の中に収録された単著和文の「遠隔教育・学習(Distance Education/Learning)の現状と今後の展開」で、日本でもここ数年急速に発展してきている遠隔教育・学習の基本や e-learning を理解する上で有益な情報を提供する目的のものである。

2 つ目は、JALT CALL SIG (Japan Association for Language Teaching Computer Assisted Language Learning Special Interest Group) が 2002 年 9 月に Swets & Zeitlinger (オランダ) から出版した本 (The Changing Face of CALL: A Japanese Perspective)の中に収録された単著英語論文“Keypal Exchanges for Writing Fluency and Intercultural Understanding”である。これは、非常勤講師として京都大学総合人間学部で 2001 年度に教育実践した内容を中心に、その成果と課題を考察したものである。この成果について、カナダのアルバータ州カルガリー市にあるカルガリー大学(University of Calgary)の言語研究センター(Language Research Centre) でゲスト・スピーカーとして招待され、2002 年 2 月 8 日に講演し、参加者たちと意見・情報交換をした。

さらに、グローバルな視点からこれまでの日本での CALL 利用の英語教育と最新の動向を踏まえレビューをした上で、1998 年から本学経済・経営学部の英語教育の一部(CALL プログラム)で実践し、効果をあげてきている Web-based English CALL について報告した。この内容については、UBC の国際大学院生や客員研究員用の宿泊施設兼研究施設の St. John's College のスペシャル・トーク・イベントにおけるゲスト・スピーカーとして 2002 年 3 月 6 日に講演し、好評を得た。また、“Web-Based and Network-Based Program for English as a Foreign Language (EFL) in Japan”の発表タイトルで、2002 年 8 月 17-20 日にベルギー・アントワープ市のアントワープ大学(University of Antwerp)で開催された 2002 International CALL Conference での口頭発表のスタイルで、研究成果の公表と共に、関連情報の交換をした。

その他には、経済学部の清水裕子教授との共著で『立命館経済学』2001 年第 2 巻に収録された研究報告「立命館大学琵琶湖草津キャンパス(BKC)における

学部の英語教育に関する調査と分析の結果」を完成させた。これは 2001 年 12 月に言語コミュニケーションセンター（現言語教育センター）の全面的な協力を得て、BKC の 3 学部の教員を対象に実施した「学部英語教育に関するアンケート調査」の集計と分析結果をまとめたものである。これまでの BKC の英語教育プログラムへの担当者以外からの意見の集約と今後の英語カリキュラム改善への提言に参考になるもので、大変有意義な報告書となっている。

また、滞在期間中に何回かの学部や下部組織の異文化コミュニケーションセンター主催の各種講演会や院生研究会が時折開催されたので、積極的に討議などに参加したと同時に、不定期ではあったが、研究に関連のある学部上位レベルのものや大学院授業（ここでは 3 月 4 日に 30 分のデモンストレーションを含むプレゼンテーションをし、情報提供をした。）に参加させてもらった。これらの活動を通して有意義な関連情報を入手できたばかりでなく、LLED 教員のみならず、大学院生でもあるカナダ国籍の現役 TEAL (Teachers of English as an Additional Language) 教員やアジア出身者の多い国際大学院生との情報・意見交換や異文化交流をすることができた。

UBC の Dr. Keneeth Reeder を中心に現在計画中的カナダ 3 大学(UBC, University of Victoria, Simon Fraser University)、米国 1 大学(Massachusetts Institute of Technology)、ドイツ 1 大学(University of Munich)、日本 1 大学（立命館大学）の 4 カ国 6 大学国際共同プロジェクト「オンライン・ソフトウェア評価基準の理論および実践研究」が本格的なものとなれば、さらに世界にアピールできるグローバル・スタンダードな研究が進展することとなり、カナダ政府からのものも含めて、本プロジェクトへの予算確保などの問題が依然として存在するが、今回の在外研究において、今後の有意義な国際交流と大きな研究成果が期待できる基本的な体制を構築することができたと言えよう。

#### <研究成果の公表>

##### 論文

「遠隔教育・学習(Distance Education/Learning)の現状と今後の展開」

昭和堂/『応用英語研究論集』 2002 年 3 月, pp. 171-188.

“Keypal Exchanges for Writing Fluency and Intercultural Understanding”

JALT CALL SIG/ *CALLing in Japan*, Swets & Zeitlinger, 2002 年 9 月, pp.187-201.

##### 学会発表

“Web-Based and Network-Based Program for English as a Foreign Language (EFL) in

Japan” 2002 International CALL Conference at University of Antwerp, Belgium, 2002  
年 8 月 17-20 日